

公共図書館のパスファインダーの実態調査

佐藤 雅

1960年代末のアメリカで、図書館利用者を求める情報源へと導くためのツールとして Canfield が「パスファインダー」を定義した。当初は一枚物のリーフレットとして提唱されたこのパスファインダーは時代の変化とともにその姿を変え、日本の図書館においても紙媒体の他に Web 上でも利用者に提供されている。しかしそれらの実態については伊藤らによる『国内における Web 上パスファインダーの現況調査』をはじめとし、普及率やその活用方法が調べられているのみで、挙げられている資料を分析した研究はほとんどない。

活用方法が研究されるということはその効果が期待されているということである。パスファインダーの現状を明らかにすることでその内容を充実させることに繋がると考え、本研究では国立国会図書館がリンクを貼っている 37 の都道府県立図書館のパスファインダーが挙げる図書を対象とし、その特にその発行年度に着目してテーマごと、図書館ごとに比較分析した。分析にあたって、①パスファインダーから本を抽出、②図書館名、テーマ、タイトル、発行年、ISBN を記録、③当該図書館で蔵書検索、④NDL-OPAC(国立国会図書館サーチ)での確認検索、という手順で Excel ファイルを作成した。なお図書の定義はユネスコの宣言を採用した(一部例外あり)。

分析の結果、まず地方ごとでは図書の多少の年代差が見られる程度だが、テーマごとでは発行年の差が大きいことが分かった。特に地域資料においては戦前のものまで存在し、10年以上前の本の数も非常に多い。次に挙げている本の冊数が、数冊から 50 冊を超えるものまでであるなど、図書館やテーマごとで大きく異なっていた。さらにパスファインダーに記載されたタイトルが誤っていることや、サブタイトルがなければ区別がつかないようなタイトルのものがあり、蔵書検索を行ってもその本を検索できないこともあった。また同じ著者の発行年が新しい本を所蔵しているにも関わらず、古い年度の本をパスファインダーに挙げているケースも見られた。

パスファインダーは利用者の情報源へのアクセスをサポートするツールであり、法律や医学など多くの図書館が扱っていたテーマについては最新の情報を利用者に提供できるものが望ましい。その役割を果たすため、作成されるパスファインダーに挙げられる本は地域資料など特定のテーマを除きできる限り新しいものが良いと思われる。また利用のしやすさという観点から、同じ図書館内でのパスファインダーのデザインの不統一や、それに伴うタイトル表記の方法が違うこと等も実際に蔵書検索をする際に戸惑う原因となりうる。以上のことから、図書館はパスファインダーを現在よりも頻繁に更新することで書誌情報の誤りをなくし、可能な限りの情報の最適化を行い、またパスファインダーの雛形をあらかじめ作成することで、図書館として統一されたパスファインダーを作成すべきと考える。

(指導教員 池内淳)